

令和7年度 徳島県立近代美術館協議会

日 時： 令和7年12月4日（木）
午後2時から

場 所： 徳島県立近代美術館 3階 講座室

〈 次 第 〉

- 1 開 会
- 2 館長挨拶
- 3 委員紹介・職員紹介
- 4 議 事
 - (1) 会長・副会長の選任について
 - (2) 令和6年度事業実施状況について
 - (3) 令和7年度組織・予算及び事業概要について
 - (4) 徳島県立近代美術館 運営計画に係る「中期計画・中期目標」について
 - (5) その他
 - <報告事項>
 - ・ 近代美術館 賈作事案について
- 5 閉 会

〈 資 料 〉

○ 次第	・・・・・・・・	1
○ 委員名簿	・・・・・・・・	2
○ 令和7年度組織図	・・・・・・・・	3
○ 令和7年度予算	・・・・・・・・	4
○ 令和7年度事業概要	・・・・・・・・	5
○ 報告事項（賈作事案）	・・・・・・・・	7
○ 年報（令和6年度）		別冊
○ 中期計画・中期目標		別冊
○ 参考資料		
◇ 配席図		（当日配布）

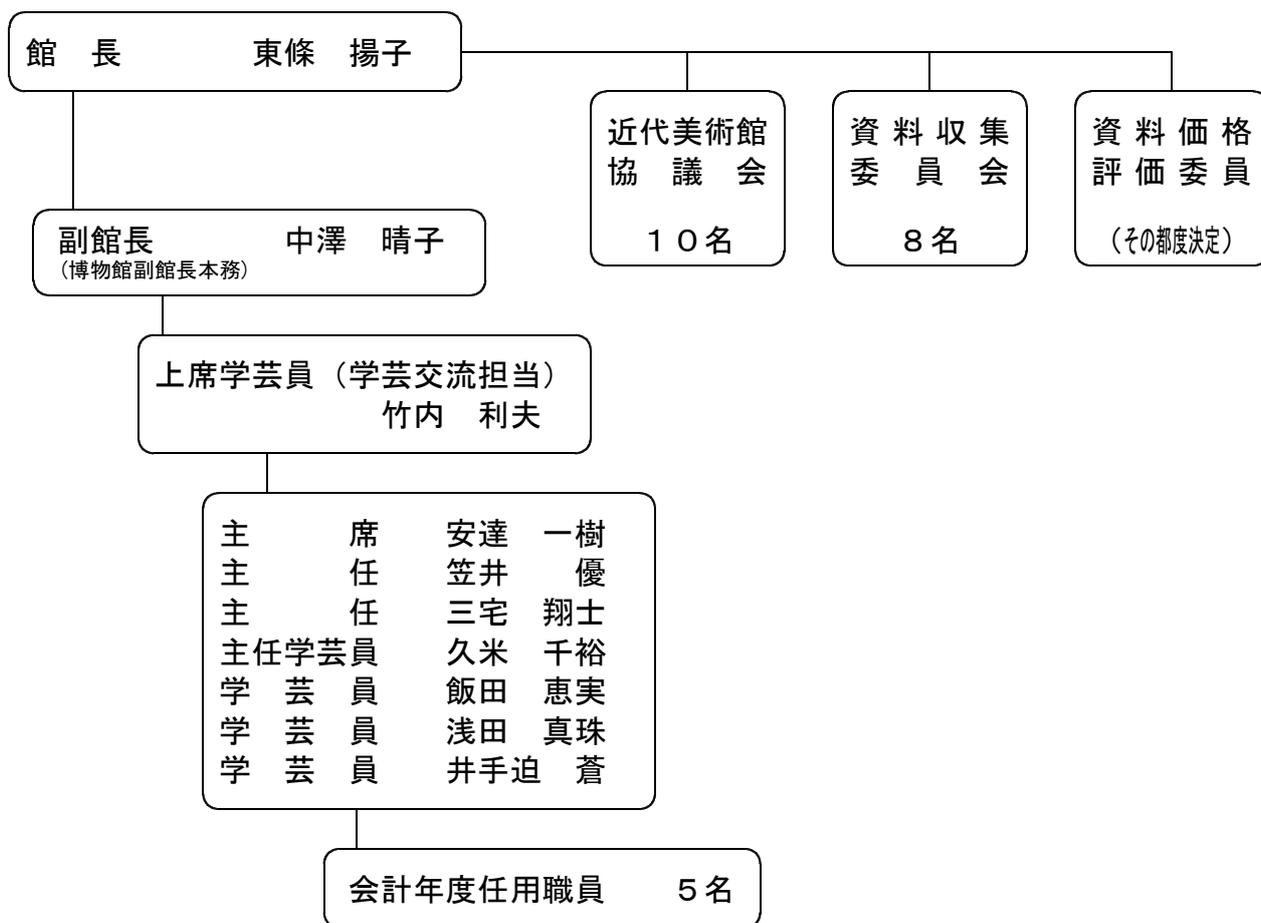
徳島県立近代美術館協議会委員名簿

氏 名	職 名
おがわ ひろひさ 小 川 裕 久	徳島市立德島城博物館 館長
かねまつ ふみこ 兼 松 文 子	公益社団法人 徳島県労働者福祉協議会 参与
かわ ばた さら 川 端 新	四国大学文学部国際文化学科 講師
こう やま じゆん こ 神 山 純 子	一般社団法人こどもとおとな研究舎 理事
さいとう ゆきこ 齋 藤 友紀子	県小学校教育研究会図画工作部会 会員
さ は ら おさむ 佐 原 理	徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授
し ま はるか 志 摩 遥	県高等学校教育研究会美術学会 会員
せのお 妹 尾 めぐみ	四国大学生生活科学部人間生活科学科 講師
ふく もと ひで たか 福 本 秀 敬	日本放送協会徳島放送局 コンテンツセンター長
はせがわ すみこ 長谷川 純 子	鳴門市市民生活部文化交流推進課ドイツ館 係長

※50音順 敬称略

令和7年度 徳島県立近代美術館組織図

(令和7年4月1日現在)



区 分		正 規	定数外	計
館 長		1		1
副 館 長		1 (1)		1 (1)
学芸交流担当	上席学芸員	1		1
	主 席	1		1
	主 任	2		2
	主任学芸員	1		1
	学 芸 員	3		3
会計年度任用職員			5	5
計		10 (1)	5	15 (1)

() は兼務で内数

令和7年度予算

(単位：千円)

事業名	7年度当初	6年度当初	比較	備考
一般管理費	4,187	4,376	△189	
展示事業費	34,242	26,774	7,468	アドベンチャー含む。
普及事業費	1,672	1,672	0	
調査研究事業費	1,142	1,142	0	
資料収集保存事業費	6,790	4,582	2,208	
ユニバーサルミュージアム展開事業費	4,048	4,497	△449	
計	52,081	43,043	9,038	

令和7年度 事業概要

1 展覧会事業

(1) 所蔵作品展（常設展）

展覧会名	会期
開館35周年記念展「キミに夢中♡～学芸員のおしごとと愛しき人間像コレクション～」	令和7年4月26日～8月31日
[大阪・関西万博特別連動企画] 浮世絵の華 －原安三郎コレクション－	令和7年9月6日～10月13日
所蔵作品展 徳島のコレクション 2025年度Ⅰ「徳島のたからもの」	令和7年9月6日～11月30日
所蔵作品展 徳島のコレクション 2025年度Ⅱ「空間往来」	令和7年12月6日～令和8年4月5日

所蔵作品展 入場者数

計 17,090名（10月末現在）

(2) 特別展など

展覧会名	会期
開館35周年記念展 「美術と野獣－人間の根源へ」	令和7年10月4日～12月14日 [2,136名] (10月末現在)
てみるの時間 2025年度 「階段ジャックワークショップ」成果展示	令和7年10月21日～12月21日 [6,771名] (10月末現在)
てみるの時間 2025年度 「ぶんかつギャラリーvol.2」	令和8年1月20日～1月25日

2 普及事業

(1) 美術館教育

所蔵作品展に関連した催し（展示解説など）	25回予定（10月末 18回実施 計545名）
特別展に関連した催し（展示解説など）	8回予定（10月末 3回実施 計72名）
講座、ワークショップ、こども鑑賞クラブ等	7回予定（10月末 3回実施 計24名）
共催事業（文化の森共催および外部とのコラボ）	7回予定 4回 計1,296名（10月末）
このうち文化の森6館連携事業（フェスティバル）	春187名、夏 751名、秋（開催予定）、冬（開催予定）
団体鑑賞（学校以外）単独含む	8回 145名（10月末）
博物館実習生の受け入れ	8月26日～8月30日 2大学、3名
学芸員養成科目への協力	11講座予定

(2) 学校教育との連携

（10月末現在）

学校の授業による美術館利用	11回実施：計 175名
学校行事（遠足など）による美術館利用	32回実施：計 1,583名

学校の授業等による講師派遣（出前授業）	4回実施：計 146名
職場体験、インターンシップ	2件実施：計 9名
講師派遣（クラブ活動、教員研修会など）	2回実施：計 28名
鑑賞教育推進プロジェクト	未実施
展覧会ごとのワークシート作成	5種作成
鑑賞シートの配布数	18種 1,716部

(3) 美術館ボランティア活動・地域との連携

アートイベントサポーター	2事業 計46名
社会教育、生涯教育への講師派遣	1回 10名（10月末）
ユニバーサルミュージアム展開事業	手話付き展示解説、ホームページ情報発信強化など

(4) 報告展示

行事名	会期
近代美術館 所蔵作品真贋事案の報告展示	令和7年5月11日~6月15日 [8,206名]

3その他

サテライトギャラリー、美術館ニュースの発行、図書の公開・レファレンス、美術館データベースの提供、ホームページ等の情報発信、ニュース郵送購読制度

近代美術館 贋作事案における購入先との合意について

1 合意の概要

徳島県と株式会社桂フランスは、平成11年1月11日付け購入契約を解除することで合意した。

県に6,720万円を返還する。

県は絵画を返還する。

2 合意の履行

令和7年10月20日 合意書の締結

令和7年10月22日 県の収入を確認

令和7年11月18日 絵画を返還

※参考

絵画の概要

作品名	自転車乗り
購入年度	平成10年度
購入金額	6,720万円

これまでの経緯

- R6.6 贋作の疑いが発覚し、調査開始
- R6.7 所蔵作品展での展示取りやめを公表
- R7.3 贋作であると判断し公表
- R7.5-6 事案の概要を説明するために報告展示を実施
- R7.7-10 科学調査

近代美術館 贋作事案における科学調査の結果について

1 調査の概要

(1) 時期

令和7年7月から10月まで

(2) 調査機関等

東京文化財研究所の協力を得て調査を行い、近代美術館において考察し、報告をまとめた。

(3) 調査方法

使用材料や制作技法に関する客観的な情報を得るために、光学調査及び各種分析を実施した。

その主な手法は

- ①顕微鏡観察
- ②蛍光X線分析
- ③ハイパースペクトルイメージング
- ④ラマン分光分析

である。(別添「調査報告」参照)

2 調査の結果

- ①顕微鏡観察により、複層的な絵具構造や紙の張り込みを確認した。
- ②蛍光X線分析により、工業的合成顔料が検出された。
- ③ハイパースペクトルイメージングにより、絵具の種類や混色の傾向が可視化された。
- ④ラマン分光分析により、20世紀中期以降に実用化された合成顔料が確認された。

以上の分析結果から、作品の制作は比較的近年に行われた可能性が高いことが判明した。

《自転車乗り》作品調査報告

徳島県立近代美術館

1. 調査の経緯と目的

徳島県立近代美術館では、2025年3月25日に、これまでジャン・メッツァンジェ(1883-1956年)作《自転車乗り》として所蔵してきた作品について、関係者の証言および来歴の調査を踏まえ、ヴォルフガング・ベルトラッキによる贋作であることを公表した。

本作は長年にわたり当館などでメッツァンジェの作品として展示や教育普及活動等に活用されてきたが、科学的分析はこれまで行われておらず、使用材料や制作技法に関する客観的な情報は十分に得られていなかった。

そこで当館では、東京文化財研究所の協力のもと、絵具や支持体などの材料分析を中心とした科学調査を実施することとした。本調査は、作品に用いられた材料および構造的特徴を明らかにし、制作方法及び制作年代の推定に資する情報を得ることを目的とするものである。なお、科学的分析の実施は東京文化財研究所に依頼し、その分析結果の解釈および調査成果の考察は徳島県立近代美術館が行った。

この報告書は、2025年7月から10月まで実施した上記の調査により得られた分析結果を取りまとめ、その成果を記録するものである。なお、本調査は真贋の再判定を目的とするものではなく、既存の判断を補足し、作品理解の一助とするものである。



タイトル：自転車乗り

技法材料：油彩、砂、コラージュ キャンバス

寸法：55.0×46.0 cm

購入年：1999年

修復歴：あり（1999年）

2. 調査方法

本調査では、作品表面および構成材料の情報を多角的に取得するため、光学観察および各種非破壊分析を実施した。観察・分析はいずれも、試料採取を行わずに作品への影響を最小限にとどめる方針で実施した。以下に各手法の概要を示す。

(1) 顕微鏡観察

まず、作品表面の状態や絵具の特徴を詳しく観察するため、デジタルマイクロスコープを使用した。亀裂や筆触、異物の付着などを拡大して確認し、光の当て方を変えながら、塗り重ねの様子等の状態を記録した。これにより、肉眼では見えない微細な変化を把握した。

(2) 蛍光X線分析 (XRF)

絵具や下地の構成を把握するため、蛍光X線分析を実施した。作品表面を測定し、元素の

分布を画像として記録することで、絵具の種類や層構造を確認した。得られたデータは、他の分析結果と照らし合わせ、作品の材料的特徴の検討に用いた。

(3) ハイパースペクトルイメージング

表面の絵具分布や塗り重ねの状態を把握するため、ハイパースペクトルカメラによる撮影を実施した。この手法は、可視光から近赤外線までの波長ごとの反射特性を測定し、肉眼では識別できない顔料の差異や、下層描画の有無、修復箇所などを検出できるものである。波長ごとの画像データを解析することで、肉眼では識別できない作品の表面および内部構造に関する情報を得た。

(4) ラマン分光分析

絵具に含まれる顔料の種類を把握するため、ラマン分光分析を実施した。ラマン分光法は、レーザー光を照射した際に生じる散乱光の変化を検出し、物質固有の分子振動から成分を特定する手法である。非破壊で微小領域を分析できることから、特定の色材部分を測定し、得られたスペクトルを既知の標準データと比較して顔料の種類を推定した。

3. 調査結果

顕微鏡観察により、既往の作品調査で確認されていた複層的な絵具構造や、紙を貼り込んだ表現の存在が改めて確認された。

蛍光 X 線分析では、鉛(Pb)、亜鉛(Zn)、チタン(Ti)、カドミウム(Cd)、クロム(Cr)などの元素が検出された。この結果から、白色部からはチタンホワイト(酸化チタン)や硫酸バリウム、黄色部からはチタンイエロー、緑色や橙色部からはカドミウム系顔料が使用された可能性が考えられる。これらはいずれも 19 世紀後半～20 世紀に使用が広がった工業的合成顔料である。また、鉛白が広い範囲で検出されたことから、下地には鉛白が使用されている可能性が示唆された。

ハイパースペクトルイメージングでは、可視光および近赤外領域の反射分光分析を行った。これらのデータを用いて絵具の種類や混色の傾向を可視化したところ、白色部ではチタンホワイト、黄色部ではチタンイエロー、青色部や緑色部では複数の合成顔料が使い分けられていることが確認された。

ラマン分光分析で得られたデータから考察を行った結果、チタンホワイト(ルチル型酸化チタン)、フタロシアニンブルー(フタロブルー)、フタロシアニングリーン(フタログリーン)など、20 世紀中期以降に実用化された合成顔料が確認された。これらの顔料は、作品の制作時期として当初想定されていた 1910 年代には使用されていない。

以上の分析結果から、本作は従来メッツァンジェの 1911—1912 年頃の作品とされてきたが、使用されている材料の特徴は、20 世紀中期以降に普及した合成顔料が含まれており、当初想定された制作年代とは一致しない可能性が高い。したがって、科学的見地からは、作品の制作が比較的近年に行われた可能性が高いと考えられる。

本調査は、真贋の再判定を目的とするものではなく、作品に用いられた素材の客観的データを記録することで、今後発見される可能性のあるベルトラッキの贋作作品の検証や、類似事例の比較研究に資する基礎資料と位置づけられる。